

7月8日(土) 共通論題① 13:30-15:00 101大講義室

「結婚をめぐる生きづらさ」を『生きづらさ学』的に分析してみる

— 生きづらさ学における「評価モデル」確立の試み —

代表者：相原征代（岐阜大学男女共同参画推進室特任助教）

報告者：小山 真紀（岐阜大学流域圏科学研究センター 准教授）

相原 征代（岐阜大学男女共同参画推進室 特任助教）

船越 高樹（岐阜大学教育推進・学生支援機構 サポートルーム 特任助教）

大崎 友記子（岐阜女子大学 家政学部生活科学科住居学専攻 教授）

吉岡 剛彦（佐賀大学教育学部 教授）

発表趣旨：前年度は相原が自由論題で「生きづらさ学」確立に向けての「指標づくり」の試案を発表したが、今年度は、共同研究「生きづらさ学」での1年間の成果を活かし、「生きづらさ評価モデル」を実際に運用し「生きづらさ」をどのように「可視化」し分析できるかを、当日参加する研究者とともに議論する。今までは、分野ごとの「対症療法」でしか分析できなかった個人の「生きづらさ」を、「生きづらさ学」による可視化によって学際的に分析することを可能にし、個々の生きづらさに「共通項」を見つけようとする試みは、個人に起因すると思われていた生きづらさを「社会文化的」なレベルへ「配分」し、その文化背景的な要素を明らかにする。

発表について：

発表者のそれぞれの専門分野にかかわる「生きづらさ」を抱える人（ペルソナ）を設定し、「自分の分野からどのようにアドバイスできるか」という内容の発表をする。いずれも個人や社会の原因だけでなく、関係性の部分にある原因に気づけるように意図し、生きづらさに別の視点が与えられるような「処方箋」にする。

当日プログラム（7月8日土曜日 13:30-15:00）

13:30-13:40 趣旨説明と当日のプログラム説明（小山）

13:40-13:50 授業プログラム実践報告—「アラフォー独身男性」の学生のみかた（相原）

13:50-14:00 法律から見た生きづらさの処方箋（吉岡）

14:00-14:10 住居学から見た生きづらさの処方箋（大崎）

14:10-14:20 防災から見た生きづらさの処方箋（小山）

14:20-14:30 障害学生支援から見た生きづらさの処方箋（船越）

14:30-15:00 質疑応答・会場との議論

日米知的交流における戦前・戦後の断続

代表者：高光佳絵（千葉大学国際教養学部准教授）

日米間の知的交流は、太平洋戦争という苦難の時代を挟んで、連綿と続いてきた。特に戦後の日米交流の多様化は、交流の内容、その担い手において著しいものがあるが、本企画では戦前の日米交流に起源を持ちつつ、戦後に形を変えて続いた交流に焦点を当て、その断続を論じるものである。

戦後日米協会会長を務めた小松隆、国際文化会館のみならず夏期アメリカ諸研究セミナー（東大＝スタンフォード、京都、長野等）等の会館以外の場での日米交流にも幅広く活躍した松本重治、高木八尺に注目して、彼らの活動の戦前・戦後の断続を考察する。後藤新平によるチャールズ・ビアード招聘、国際文化振興会、太平洋問題調査会、日米協会などで培われた経験は戦争を経て、どのような反省を伴い、またどのように生かされたのか。報告者3名による史料に基づく考察と、フロアーとの対話を通じて、描き出そうとする試みであり、同時代を知る方々の積極的な発言を期待したい。

司会 高光佳絵（千葉大学国際教養学部准教授）

13:30-13:55

報告1 「小松隆関係文書に見る日米交流の戦前・戦後の断続」

飯森明子（常磐大学国際学部非常勤講師）

13:55-14:00

質疑応答1

14:00-14:25

報告2 「アメリカ研究者と日米知的交流」

中嶋啓雄（大阪大学大学院国際公共政策研究科教授）

14:25-14:30

質疑応答2

14:30-14:55

報告3 「国際文化会館をめぐる戦後日米関係」

高光佳絵（千葉大学国際教養学部准教授）

14:55-15:00

質疑応答3

故郷を求めて・故郷を世界へ—近代台湾と日本・日本人—

代表者：井竿富雄（山口県立大学国際文化学部教授）

司会・コーディネーター 井竿富雄（山口県立大学国際文化学部教授）

報告者1 邱函妮（台湾・中央研究院歴史語言研究所博士研究員）

日本統治期台湾における「美術」制度と台湾人画家—陳澄波を例として

報告者2 吉永敦征（山口県立大学国際文化学部准教授）

陳澄波が学んだ日本と西洋思想—残されたノートを読む

報告者3 安溪遊地（山口県立大学特別補佐）

台湾留用日本人の見た2・28事件—同人『回覧雑誌』と國分直一フィールド
ノートの対比から

報告時間は各20分とする。

企画要旨

2015年、山口県防府市の図書館から、一枚の油彩画が再発見された。この絵は、元台湾総督・貴族院議員上山満之進(1869-1938)が、台湾総督退任後現地の画家陳澄波(1895-1947)に依頼して描いてもらったものであった。この絵画は上山の没後、生前からの宿願で故郷に建設された三哲文庫(現・防府市立防府図書館)に寄贈された。この絵をめぐる日台双方の、研究者や市民の相互訪問の旅が今回の共通論題へと報告者を導いた。

この共通論題では、半世紀におよぶ植民地統治を通して台湾と日本の双方が経験したアイデンティティの変容と後世への影響という問題を、政治や経済といった側面からだけではなく、文化や学問・芸術を通してとらえなおすことを目指している。上山満之進といえは「台湾銀行危機」の対処を行った総督として知られるが、ここでは「台湾美術展覧会」スタート時の総督としての側面がとりあげられていくであろう。陳澄波は、日本で教育を受け、中国で教鞭を取り、最後は二二八事件で公開銃殺された画家である。多作であり、方法論や美学の吸収に熱心だった陳は、帝国日本の美術という回路を通して故郷台湾から世界に通ずる美を探求し続けた。邱・吉永報告ではこの部分からの問題提起を行う。

台湾に植民者として入り、植民地に新しい故郷を求めた日本人たちがこの歴史に加わる。安溪報告では、戦後台湾に留用された金関丈夫、立石鉄臣、國分直一らの同人が一部だけ作成した『回覧雑誌』と戦時中の『民俗台湾』の表現の対比から、帝国の検閲が消失した後もなお自己抑制が働いていたことを述べる。彼らが、時には台湾の各民族とともに作り上げたものは、戦後の日本にも実は多くが遺されていた。戦後「他郷」である日本に生きた旧植民者たちの営みは、実は植民地がどのような営みによって維持されていたのかという、統治の根本にかかわる問題としても登場してくるといえるだろう。

「国」を意識するとき——文化的越境性から考える伝統、民族、経済——

代表者：高橋梓（近畿大学特任講師）

グローバリゼーションとローカリゼーションは相互作用的に進展することはよく知られているが、近年の社会情勢を鑑みるに、両者はあたかも相反するかのように展開している。世界各国では、グローバル化の圧力に晒された人々の反発が、国家や民族といったローカルな共同体への排他的な帰属意識の高揚へと繋がり、国際レジームを志向する人々との間で鋭い対立を見せている。この現象の背後に自文化の捉え方が深く関わっていることは明らかであろう。共同体的価値とは自文化そのものであり、従って異文化との接触は時として激しい抵抗感や排他意識を惹起するのである。

しかし今日までの文化研究が教えるように、文化は越境的な性格を備え、時として政治的国境を越えて拡大する。自文化が異文化との混淆によって動的に生成する事実はよく知られているが、ここで注目すべきは、異文化を咀嚼し、時に抵抗によって自文化を創り上げる人々の個人的な営みである。文化の動的性格が発揮される最小の単位、すなわち個人による異文化受容の事例を分析することで、我々は文化の特質を理解し、「国」と「他の国」の文化的共存関係を改めて確認することができるのではないだろうか。

本セッションでは、異文化交流の最小単位と言うべき個人の営みに着目し、それぞれが内側に宿る「国」を意識しつつ異文化に向き合う事例を考察してみたい。パネリストは18世紀から20世紀の各国の文学・映画・歴史資料を考察対象とし、その深層に潜む個人の自文化理解、異文化受容・抵抗の過程を明らかにすることを試みる。発表後には、それぞれの分析結果を比較し、時代・空間を超えた異文化交流の普遍性について議論を展開したい。

司会：高橋梓（近畿大学特任講師、発表兼）

1. 岡野薫（沖縄国際大学講師）：「閉ざされた国」という理想—エンゲルベルト・ケンプファー「鎖国論」（1712）における「グローバリズム」批判—
2. 朝立康太郎（西南学院大学准教授）：自由化と民主化を巡る動揺—19世紀前半のアメリカ合衆国における南部知識人の思想—
3. 高橋梓：堀辰雄の日本文化傾倒期におけるマルセル・ブルースト受容
4. 李敬淑（宮城学院女子大学准教授）：＜民族＞として想像された女優—植民地朝鮮における＜李香蘭表象＞の受容—

※趣旨説明2分・発表各17分・討論20分

地域社会からみた「2020年」の越え方—ジェンダー・地方分権・オリンピック—

代表者：梅津顕一郎（宮崎公立大学人文学部准教授）

我が国においてもハイ・モダニティ化が確実に進展していると思われる中、現在、東京オリンピックが開催される「2020年」を一つの目標に、様々な形での「社会改善」が図られている。例えば、2015年8月に参院本会議で可決、成立した「女性活躍推進法」では、女性の積極的登用を成長戦略の重点として位置づけ、2020年までに30%の女性管理職率という具体的な数値目標を掲げている。また「地方分権」という点でも、現在政府の地方分権改革推進本部員に、丸川珠代東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当国務大臣も名を連ねており「復興五輪」を謳った2020年の東京オリンピックが、分権促進に何らかの働きをすべく期待されていることが伺える。

これらの動きは、少々大上段に構えた言い方をするならば、「前期近代型社会システムからの脱却と後期近代への対応」ということになるであろう。では、これらの試みは、果たしてもくろみ通りに実を結びうるものなのか。さらに言えば「2020年」をひとつのメルクマールとするような「まなざし」自体、どの程度正当性を持ちうるものなのか。そして、地域社会はこの流れにどのように参画すべきなのか。

ここでは後期近代への対応とともに、戦前戦後を通して我が国を機能させてきた中央集権型巨大システムに代わるものが今後ますます必要とされるであろうことを共通理解としつつ、2020年を地域社会がどう「越えて」ゆけるのかについて考えていく。

司会 梅津顕一郎（宮崎公立大学人文学部 准教授） 趣旨説明5分 各発表20分

「202030 女性活躍の可能性と課題」 四方 由美（宮崎公立大学人文学部 教授）

「戦前における地方分権のルーツ」 有馬 晋作（宮崎公立大学 学長）

「オリンピック報道に見る巨大文化イベントへの国家主義的まなざしの解体」

梅津顕一郎（宮崎公立大学人文学部 准教授）

質疑応答および討議25分

国際文化学の視点から考えるグローバル人材育成の新たな方法論

代表者：斉藤理（山口県立大学教授）

1) 概要：

語学教育や留学促進に偏重しがちなわが国のグローバル人材育成の課題点を視野に入れつつ、国際文化学らしい育成プログラムとは何かをテーマに、その種々の方法論を探る。ここではとくに、インターカルチュラルの視軸から「文化的ダイナミズムの現場に直接触れること」の意義、ならびにこれをモットーとした実践のあり方について多面的に議論を深めていきたいと考えている。

2) プログラム：

①報告1： 斉藤理（山口県立大学教授） <15分間>

「世界と地域の繋ぎ手になる『媒介』探し演習」

山口県立大学で試行した「自主ゼミ」スタイルの演習の効果、課題等について報告する。

②報告2： 加藤恵美（早稲田大学非常勤講師） <15分間>

「朝鮮学校を調査対象とした大学生の演習手法とその展開可能性」

日本の中の異文化圏に触れる、という「外からの目」と、じつは世代交代等でその運営維持に頭を悩ませている「内からの目」とのギャップが存在し、「朝鮮」という概念の再編成を、日本社会も、学校そのものも迫られている、という現実を浮き彫りにしつつ、この現場に大学生がどのように関与できるのかを探る。

③報告3： 菅野敦志（名桜大学上級准教授） <15分間>

「沖縄から発信する東アジア海外実習—地域間・文化間を跨ぐ試み」

「沖縄—台湾」に重きを置いた実習内容を持つ「現地実習東アジアコース」（名桜大学国際学群国際文化専攻必修科目）科目担当者の視点から、国際社会からは「国家」としての位置づけが与えられてはいないものの、ともに個性あふれる「地域」として独自の存在感を有する両地域を比較し、両地域の歴史的・文化的なつながりを知ることで促される、国境を越える「地域性と『国際』（多文化）性」の気づきとその意義について紹介する。

④報告4： 岩野雅子（山口県立大学教授） <15分間>

「カザフスタンにおける言語教育の転換と文化理解の変容」

ロシア語中心から英語教育への大きな転換をもたらしたうねりと3言語政策の動き、また言語教育の転換が文化理解にどのような影響を与えるのかについて扱う。「グローバル観」そのものが、ロシア圏から欧米圏へと歴史的変換を遂げつつある現場の事例報告。

3) 討論 <30分間>

申請者（司会）：斉藤理（山口県立大学教授）